

22. 旅と温泉と医療と

医事万華鏡

紅葉の季節になりました。例年でしたら、暇さえあれば車で遠出したり、目帰り旅行を楽しむところですが、今年は新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、素直に旅を愉しめなくなっていました。ただ、そんな悠長なことを言われていられる身分とは違い、旅行者の多くは世界規模で起きているこの前代未聞の事態の前に、大変なご苦労をされていることでしょう。そう思うと、「GoToトラベルキャンペーン」は、推進する以上、こうした経済的に大打撃を受けている、旅行業界の回復に寄与するような仕組みであってほしいものです。

ところで、旅とセットの言葉に「観光」があります。そもそも観光という言葉は、中国の古典「易経」の中にある「観国之光」、すなわち「国の光を観る」（他の国へ行って、良い点を見て学んでくる）に由来するそうです。国の光とは、その地域独特の文化や生活習慣、培われた伝統、格式、その地でしか味わえないもの指し、その光に導かれて人は旅に出かけるといいます。ちなみに、日本で「観光」という言葉は、幕末に日米条約を結ぶための使節団が乗った船を「観光丸」と名付けたのがその始まりだそうです。その後、

明治時代に入り日本政府が来日外国人を「外国人観光客」と呼んだのをきっかけに広まったそうです。

とはいえ、庶民の旅の始まりは、平安時代の熊野詣のようなお参りの旅で、室町時代や江戸時代には、お伊勢参りという形で旅が大流行しました。つまり、日本人の多くにとって旅とは信仰心とともにあり、その意味で、昨今話題のパワースポット巡りというのは、単なるブームではなく、日本人の心性を巧みに体現した営みだと言えるでしょう。

ところで、観光名所には温泉がつきものです。温泉と言えば、温泉に通ったり滞在したりして、疾病や傷を平癒する湯治があります。いわゆる温泉療法は、世界中で古より続いてきた広義の医療行為ですから、昨今話題の「観光医療」は、同じ根から派生した概念と言えるでしょう。旅という非日常の体験は、心身ともにリフレッシュさせてくれます。旅というハレの日を存分に楽しむことで生命エネルギーを取り戻し、ケという日常生活に戻ることができるようからです。

ただ残念なことに、今年は私も理事を務める国際観光医療学会も開催中止になってしまいました。新型コロナウイルス感染症に翻弄された1年、全てが正常な営みに戻るにはまだまだ時間がかかりそうですが、知己との交わりや見知らぬ人との新たな出逢いを愉しむ、そんな日常が再び訪れることを願って止みません。

（JMS主幹・野村元久）

